

みみん

〔題字〕谷川俊太郎さん



せんだい・みやぎNPOセンターニュースレター“みんみん”は、あらゆる組織が社会課題解決をキーワードに出会うきっかけづくりと、活動を発信をすることから、新しい風を起こしていきたいと願っています。

新年のごあいさつ

新年明けましておめでとうございます。

皆様健やかに新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

まもなく東日本大震災から3年が経とうとしています。せんだい・みやぎNPOセンターは、震災後様々なセクターとの連携により、震災からの復興につながる事業に取り組み、復興とさらにその先を担う人材育成に全力を傾注してきました。被災地では少しずつではありますが、次第に復旧から本格的な復興へと状況が移りつつあり、そこからまた新たな課題が明らかになろうとしています。その中で市民が他のセクターとも協力しながら、被災地をはじめとする各地の社会的課題・地域的課題を解決していく力が、ますます重要性を増しています。私たちは、震災後に出会うこととなった各地の皆様とも力を合わせながら、復興から再生を見据えたまちづくり・地域づくりの協働の拠点を築いていくと同時に、そうした新しいまちづくり・地域づくりを主体的に担っていくことのできる地域公益人材の育成にも全力を尽くしていく所存です。被災地と被災者の皆様に寄り添いながら、この目標に向って、力強く前進していきたいと考えております。

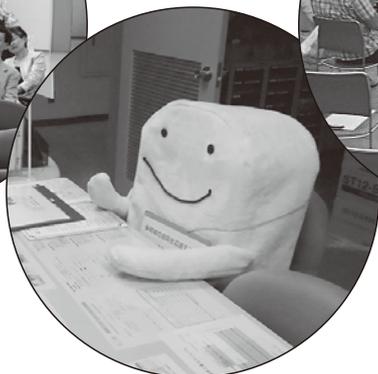
今年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

せんだい・みやぎNPOセンター 代表理事
大滝 精一 紅邑 晶子

目次

- P 2 ～ 4
- P 5 ……
- P 6 ……
- P 7 ……
- P 8 ……

- クロスセクター新春鼎談「市民活動の「これまで」と「これから」
- 仙台市・多賀城市・岩沼市―市民活動に関わる担当課長が語る鼎談
- 富士通エフサス新人研修、復興応援隊広報スキルアップ連続講座開催報告
- 住友商事インターン生による、プログラム報告
- 『ライブラリレ』
- SENDAI NPO子育て応援隊ピンポンパン☆
- 新規会員・継続会員、編集後記、お知らせ、連絡先等



クロスセクター

それぞれのリソースを活かし、
これからの地域を創造しよう。

これからの地域形成に不可欠な存在といわれる、
NPO、企業、行政、大学等の各セクター（部門）が考える地域づくりとは？
地域づくりプロジェクトのご紹介や、取り組みをしている方にお話を伺います。

新春鼎談

市民活動の「これまで」と「これから」

仙台市・多賀城市・岩沼市—市民活動に関わる担当課長が語る

話し手 仙台市市民協働推進課課長 松川真也さん、多賀城市地域コミュニティ課課長 小野史典さん、
岩沼市さわやか市政推進課課長 星ふさ子さん

聞き手 せんだい・みやぎNPOセンター 代表理事 紅邑晶子

穏やかな日差しが差し込む、せんだい・みやぎNPOセンターが
入居するビルの7階オフィス。当センターが施設運営をする仙台
市、多賀城市、運営支援事業で関わりがある岩沼市の担当課長
の皆様をお招きし、新春特別鼎談を行いました。聞き手は、当
センター代表理事である紅邑晶子。話し手は、松川真也仙台市
市民協働推進課課長、小野史典多賀城市地域コミュニティ課課長、
星ふさ子岩沼市さわやか市政推進課課長の皆様です。

■市民の声が行政を動かす～ サポートセンターの設置に向けた 市民と行政の動き

紅邑：今日は、大変お忙しい中お集まりいただき誠にありがとう
ございます。当センターは市民活動支援と平行して行政施設の管
理運営を長年行ってまいりました。今日は、私どもと関わりのある
行政の皆さんから、それぞれの地域、お立場から見てくる
「これまで」の市民活動の変遷や成果、展望などをお伺いし、「こ
れから」の地域づくりについてざっくばらんにご意見を頂戴でき
ればと思っております。

星：岩沼市の市民活動サポートセンターは、平成20年に、他課勤
務だった私も含む15名の市職員（協働のまちづくり検討委員会）
と14名の市民（協働のまちづくり推進会議）からなるそれぞれの
会が設置され、大滝先生（当センター代表理事）を交え協働のま
ちづくりについての検討を重ねてきたところから始まります。

私はその後担当課へ配属され、サポートセンター設置に向け
て様々な検討を重ねてきましたが、ようやくスタートする年の3月
に震災が発生（当初9月にセンターを試行する予定だった）。混乱
の中サポートセンターの案件は一旦保留になりました。しかし、
以前推進会議に参加していた市民10名が「岩沼市協働のかけは
し隊」を結成し、開設に向けて担当課と一緒に市民主導で働きか
けた結果、ようやく昨年の12月にサポートセンター設置が試行

され17.16㎡という小さい部屋ですが、新しい一歩を踏み出す
ことができました。

現在建物の一 corner、小さなサポートセンターですが「場所じゃな
いよ、ソフト面が大事」と加藤先生（前当センター代表理事）の言
葉が今でも耳から離れません。場所は後からついてくる、市民の
声から始まった小さな部屋のサポートセンターですが、ソフト面
を充実し、市民に認められ、必要となつて大きな場所へと成長で
きることを願っています。

小野：多賀城市の市民活動や市民協働は、行政改革の中行われ
てきました。ですから市民によっては行政改革の一環と思われ
てしまった部分もあり、その誤解を解くことも必要でした。町内会
や子ども会の活動に積極的に顔を出して理解をしてもらう、顔と
顔をつなぎ関係を作っていく、難しいことでしたし仕事として悩
んだ時期もありました。

市の市民活動の方針が定まり、多賀城市の市民活動サポート
センターはNPOのほか、生涯学習団体、町内会自治体を支援対
象としているのが特徴的です。活動の場の提供や、情報収集、人
材育成の拠点として、初年度は1万4千人の利用があり、最近は2
万人と着実に増えてきています。多賀城には公民館が3つしかなく、
生涯学習団体が利用する施設をサポートセンターへ転用する
形となりました。そういった点でも、利用対象に生涯学習団体や
町内会自治体の地縁組織が含まれたのは大きいことだったかも
しれません。

このように、市民活動やNPOというものを市民に浸透させる
ところから始まり、スタッフが地域のイベントに参加する中で認
知度が高まり、市内の様々な機関と有機的につながりながら、現
在は公民館とも市役所とも違う、まさに市民活動を象徴する場
所として市民に理解されています。

松川：最初に私事になりますが、仙台市の市民協働推進課へ
2013年春に異動し、これまで市民活動との接点も無く初めて経
験する仕事に正直戸惑ってきた数ヶ月でした。でもその分、サポ



松川 真也さん
仙台市市民協働推進課課長

ートセンターができて14年が経ちますが、課題や問題点については新鮮な目で見られたかなと思っています。

仙台市のサポートセンター立ち上げの時代背景には、阪神・淡路大震災、NPO法の施行、並行して市民活動の高まりということがあり、市民公益活動促進条例を制定しサポートセンターの設置まで、行政と民間が二人三脚で進めてきました。全国初の公設NPO営の市民活動サポートセンターは、そのような中で誕生しましたが、市民の側の盛り上がりの方、行政側に公益活動、市民活動への理解が浸透していったかどうかに関して、私自身明言できません。

サポートセンターの運営をまかせっきりにしていたとは思いませんが、委託や助成を通じて関わりを持ちつつも、設置当初の情熱がずっと維持されていたかどうか。どちらかというところではなかったように思います。

ですから、行政側の職員に常に協働や市民活動に対する意識を持ってもらえるような仕掛けをしつつ、市民と共に考える場を作っていく必要があると思います。

多賀城市、岩沼市も仙台市同様、震災以降地域との連携が見直されています。仙台市には市民センターが60近くありますがそこが地域の拠点になりえているかと考えたとき、サイズ的には(市民センターは中学校区に1箇所設置)ちょうどいい規模だと思います。まちづくり、地域の課題解決や魅力の向上などに地縁組織や市民活動団体が取り組んでいますが、目的が同じもの同士をつなぐ役割としてサポートセンターに期待するところがあります。そのような取り組みから新たに市民活動が盛り上がり、そこに行政が参画するという流れもあるように思います。

■市民活動に影響する行政の課題

紅邑: 仙台に始まり多賀城、岩沼とサポートセンターが設置されてきましたが、お話を聞いていますと、市民の声の高まりからすべてが始まっているということがわかります。ただ、設置から10年以上も経つ仙台市では、一回りして当初の課題に近い、例えば今の岩沼市の課題を抱えているようにも感じます。行政側の仕組み

にも問題はあるのでしょうか？

星: よく言われる「縦割り」の組織にも問題があると思います。課同士の連携が大切になりますね。

松川: 組織の大きさにもよるとは思いますが、人事異動を重ねるなかで、職員一人ひとりが横とのつながりを持つなど、行政内での協働の経験を持つ機会が少なかったのではないのでしょうか。またその意識が弱いように感じます。

星: 人によっては、上手につながれる人もいると思います。そういう人が手本を見せて、横串をさす土壌を作っていく、意識的にやっていかないとつながらないと思いますね。

小野: 確かにそうですね。ただ、きちんとした仕組みとしてはいいのですが、多賀城市ではその環境があるような気がします。調整の場が必要となると、庁内では自然に繋がっているようです。

紅邑: 庁内でどのような仕組みを作り「見える化」をし、どのように共有していくのかが課題なのかもしれませんね。

■「これから」のまちづくりと市民活動

紅邑: これからの市民活動にとどまらず、まちづくり、そしてサポートセンターの役割などについて、お話をお願いします。

小野: 多賀城市としては、地縁組織、町内会や自治会の力が再度発揮できればと考えています。近年、阪神淡路の震災、市町村大合併、東日本大震災と3つの大きな山を越え、社会の変化とともに地域そのものまで大きく変革させられたように思います。元来、地域の問題は地域自らが解決してきました。しかし、例えば防犯や環境、子どもや高齢者に関することなどの解決機能は専門家に移管し、地域には総合的に物事を考える人がいなくなってきました。元に戻ることは難しいですが、だからこそ、生涯学習団体や市民活動団体などと一緒に新しい形のローカルコミュニティを形成できたらと考えます。その拠点として、サポートセンターが「あそこに行けば繋がることできる」施設だと市民の皆様認知されるように取り組んでいきます。



小野 史典さん
多賀城市地域コミュニケーション課課長



星 ぶさ子さん
岩沼市さわやか市政推進課課長

松川: 仙台市は現在、新しい市民協働の指針作りを行っているところで、これからの市民協働のありかた、まちづくりについて検討しています。

しかし、いいまちにしたいという思いは同じでも行政は分野ごとの縦割りで物事が進み、それぞれの担当課だけの動きにとどまってしまうがちです。しかし、それは市民にとっては関係の無いことです。市民が行政に相談しても、部署ごとに温度差があるというのでは結果は明らかです。横のつながり、それは行政内でも外でも考えられることです。例えば、市民センターとサポートセンターが協働してまちづくりを行う、待っているのではなくもつと地域に出て行くことで見えることもあると思います。

星: 私自身、机上の業務だけでは市民との接点もなくよい仕事はできないと思っています。庁内の席を空けて外に出る。顔と顔を

合わせながら新しいサポートセンターの説明をし、理解を求める。相手に伝わったときの喜びは大きいです。とはいえ、話の中に市民と行政の溝を感じる時があります。だからこそ、行政内の横のつながり、市民と行政のつながりをさらに構築していきたいと考えます。

現在、市長を交えての市民との懇談会を開催していますが、要望等が多く、もつと深い部分の話までは進みません。市政の状況を理解いただきまちづくりを推進するために「こんな課題がある」「どうしたら解決できるか」そんな議論ができることが目標です。そして、サポートセンターをとおして行政だけで解決できること、市民だけで解決できること、一緒に取り組めば解決しやすくなることなど、様々な解決策を市民とともに考えられればと思います。

小野: 多賀城市も、市長との懇談会「おばんです懇談会」を市内13箇所巡回しながら毎月開催しています。行政側の発信、そして市民の声を聞く、そこが基本ですよ。

紅邑: ただ現場に行くのではなく、地域の課題を俯瞰で見ることでも大事なことです。地域の課題をただ地域の人たちだけで解決するのではなく、俯瞰で見られるよその人を上手に活用することで潤滑油になることもあります。地域と市民活動・NPO団体の間、そこにサポートセンターの存在があるように思います。

そして、ひとつの自治体だけではできないことも、自治体同士がつながることで解決できることもあると思います。そのようなコミュニケーションの場、時間を提供していくことも、せんだい・みやぎNPOセンターの大事な役割だと実感しています。

これからもこのような自治体を越えて情報交換や意見交換を積極的に持っていきたいと思います。

(記録・編集 仙台市市民活動サポートセンター 田口博徳)



富士通エフサス新入社員研修 「復興支援活動」

今年の8月から10月にかけて、富士通エフサスの新入社員研修の一環で行われた「復興支援活動」の受入を行いました。当センターでは事前オリエンテーションの企画運営、活動プログラムの設計、当日の引率を行いました。

■実施概要

新入社員研修プログラムの一環として行われた「復興支援活動」は今年の8月から10月にかけて石巻市で実施されました。約100名の新入社員を4班に分け、それぞれ2泊3日のプログラムで活動を行いました。被災住民との交流や語り部ガイドによる被災地ツアーのほか、実際に体を動かして、現地団体との活動に取り組みました。雄勝地区では雄勝花物語、sweet treat 311の協力のもと、仮設商店街の花壇の整備や廃校の再生プロジェクトに取り組みました。また北上地区では、現地で活動するパルシックや住民の方と一緒に仮設住民のための市民農園の草取りなどに取り組みました。プログラムを組むうえで、「住民のためになる支援活動」を目的とし、現地活動団体と調整を行いました。

■参加した新入社員の意識の変化

活動前のワークショップでは「自分が被災地のために何ができるか見つけたい」という意見が多く出ていました。2泊3日の活動の中で、実際に被災地に降り立つ事や被災住民の話を通して、多角的に被災地の「今」を知ってもらいました。活動後のワークショップでは「復興があまり進んでいない状況を周りの人に伝えたい」、「まだ何ができるかわからないが、興味を持って東北の復興を見届けていきたい」などの感想が上がり、多くの新入社員から明らかな意識の変化を感じ取る事ができました。

■地域と企業の継続的な関わりに向けて

今回活動後に行った現地受入団体へのヒアリングでは「スポットではなく継続的な関わり」を求める声が多く出ていました。その言葉の裏には、被災から時間が経つにつれ、徐々に支援の手が減っているという背景があります。

今回の研修をきっかけに、先日同社の社内研修の一環で当センター代表の紅邑が講話をする機会を頂きました。内容は「これから求められる被災地の支援のあり方」というものでした。講話後に行われたワークや懇親会では、社員の方々の言葉の端々から「企業として被災地に何ができるか」ということを真剣に考えられていると感じ、企業のリソースを使った支援への関心の高さに驚かされました。今回の新入社員研修を契機に、今後も長く続く復興に向け、企業を地域につなげるお手伝いできればと思います。

(みやぎ連携復興センター 中沢峻)

広報スキルアップ連続講座 開催報告

今年度、みやぎ連携復興センターでは、復興応援隊サポート事業として、広報スキルアップ講座、コーディネイトスキルアップ講座をそれぞれ全3回にわたり開催中です。今回は、各地域で情報発信(webやかかわら版等)を担当する隊員の皆さんを対象とした「地域発!コミュニティの伝えるチカラを引き出す広報スキルアップ連続講座」(第1回~2回)の様子をご紹介します。

■第1回「地域発 情報発信のチカラ」「引き出すチカラ」講座 (10月17日開催)

第1回講座では、「地域発 情報発信のチカラ」「引き出すチカラ」と題した2部構成により、石巻日日新聞社の武内宏之さんとミライト株式会社 鈴木圭介さんをそれぞれ講師にお招きしました。

「地域発 情報発信のチカラ」では、武内さんより震災後に石巻日日新聞社が取った行動(輪転機が一部水没し使えないなか被災した住民に必要な生活情報を届けるために手書きの壁新聞を発行したエピソード等)を伺いました。地域に密着した情報発信の在り方についての講話にも、参加者の皆さんは真剣に耳を傾けていました。

「引き出すチカラ」では、鈴木さんより取材の仕方や文章の書き方についてお話いただきました。その後、隊員の皆さんには模擬取材をしていただきました。各グループで皆さんそれぞれがインタビューのテーマを設定し(復興応援隊の活動に関わることになったきっかけ等)、相手からエピソードをうまく引き出しながら記事にまとめていく作業です。模擬取材を通して次第に場の空気もあたたまり、休憩時間になっても話が尽きないほどでした。

■第2回「組むチカラ」講座(11月26日開催)

第2回講座では、「組むチカラ」と題し、一般社団法人メディアデザインの真山正太さんを講師にお招きしました。広報誌等を制作する際に必要なデザインレイアウトの基礎を学んだほか、隊員の皆さんが現在発行している広報誌や地域新聞を基に意見交換を行いました。皆さんからは「いろいろな角度から意見が出て、自分では気づかないところにも気づくことができた」「今回の講座を活かしてチラシ等を制作していきたいと思う」等の感想があげられました。

■隊員の取組みを多面的にサポート

宮城県内14地区で活動する復興応援隊や地域支援員等の皆さんは総勢60名のほりります。みやぎ連携復興センターでは今回ご紹介した広報スキルアップ連続講座のほか、様々な研修や講座、現地訪問や交流の機会を通して、隊員の皆さんの多岐にわたる復興への取組みを多面的にサポートしていきます。

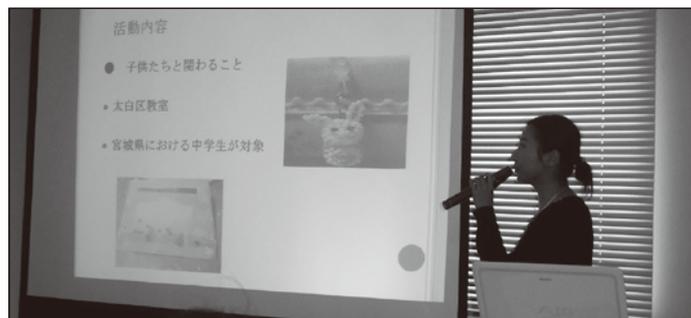
(みやぎ連携復興センター 小林紀子)

東日本再生ユースチャレンジ・インターンシップ奨励プログラム —インターンの活動—

7月1日から始まった「東日本再生ユースチャレンジ・インターンシップ奨励プログラム」は活動期間が6ヶ月を過ぎ、残された時間もあとわずかとなってきました。8つの団体に活動する13名のインターンは、各々の活動に精力的に取り組んでいます。当センターインターンは、月次報告書の取りまとめ、インターン交流会や報告会の企画・運営などを行っています

■インターン交流会

当センターインターンでは、8つの団体に分かれて活動するインターンの横のつながりを大切にしていいため、1~2ヶ月に1回インターン交流会を開催しています。内容は主に、活動をしていく上での悩みの共有です。各自の活動の振り返りを踏まえて少人数で話し合い、最後に全体へ発表します。インターン同士で意見を交換することにより、新しいアイデアや解決策が生まれます。活動をより充実したものにするために、今後も続けていく予定です。



■中間報告会

11月24日(日)に、本プログラムの中間報告会を開催しました。受け入れ団体の方々、市民社会創造ファンドの方々、住友商事の方々に加え、インターン一期生のみなさんや、福島からもインターンのみなさんが足を運んでくれました。

報告会では、13名のインターンが団体での活動内容、活動を通しての気づき、今後の抱負を発表しました。各々の個性が表れる発表で、5ヶ月の活動を通して多くの気づきを得ていることが伝わってきました。発表を受けて、各インターンには参加者からのメッセージが届きます。多くの方々に応援していただいているので、3月の活動終了まで全力で頑張っていきたいと思います。

(インターン生 寺田ゆかり)



Beny's Note

代表理事 紅邑晶子

市民活動団体にとって身近な 条例についての勉強会

宮城県内で市民活動に関わっている人たちは、自分たちに関係する条例の存在を知っているのでしょうか?NPO法人であれば、特定非営利活動促進法はご存知と思います。では、平成10年12月に制定された「宮城県の民間非営利活動を促進するための条例」、仙台市内で活動している市民活動団体は平成10年12月に制定された、「仙台市市民公益活動の促進に関する条例」についてご存知でしょうか?

いずれの条例も制定されてから15年近く過ぎています。条例名にある【民間非営利活動】【市民公益活動】とは、いわゆる市民活動のことですが、それを促進するためにわざわざ条例を作ることになった背景は、国の法律で【特定非営利活動促進法】が平成10年12月に施行されることを受けてのことでした。この条例ができたころは、ま

だ設立していなかった団体も少なくないと思いますが、こういった条例があるということは、少なからず市民活動団体の活動に関わるルールがここに記されているということです。

条例は、自治体が法律で決められたことをその範囲内で制定することができるまで、法律ののっつて自治体(都道府県や市町村)が事務処理をしやすくするために作ります。条例を知らなくても活動はできますが、そこには住民の権利を制限したり、義務を課したりすることが記されているので、市民活動を行ううえで、法人格のあるなしに関わらず、条例がその活動を規制したりすることも大いにあります。わたしたちが県の条例はどういうものか知らず活動しているというのは、運転ルールを知らずに車を運転しているようなことです。けれども、条例とはどういうものか。どのように作られるのか。条例作りに自分たちの意見を反映させることができるとしたら、安心して運転もしやすくなるわけです。

ちょうどいま、宮城県も仙台市もそれぞれの条例について再検討を始めようとしています。そこでわたしたちは、この機会に市民活動団体にとって身近な条例についての勉強会を12月から始めました。今回は、2月17日19:00より、仙台市市民活動サポートセンター研修室5で開催します。ご関心のある方は、ぜひご参加ください。

活動やニーズ、「志」でつながろう。

ライブラリレ

毎号「みやぎNPO情報ライブラリー」登録団体の中から、ひとつをご紹介します。

SENDAI NPO

今回は 子育て応援隊ピンポンパン☆

<http://fields.canpan.info/organization/detail/1933666230>

団体のみなさんにお話を伺いました。

活動内容

「SENDAI NPO 子育て応援隊ピンポンパン☆」(以下、ピンポンパン☆)は、幼稚園教諭、保育士、レクリエーションインストラクターでつくる子育て応援隊です。平成16年9月に発足し、親子と一緒に楽しいひとときを過ごしてもらうためのイベントを開催するなど、子育て支援の活動をしています。

みやぎ生協新田東店の店舗内(あそびば)にて月・火・木・金(不定期)午前午後の30分間の月20回程度行なっています。その他には幼稚園、保育所、児童館、市民センター、のびすくなどのイベント開催、講習会の講師派遣なども行なっています。



現在の活動での、注目ポイント

みやぎ生協新田東店店舗内のあそびばには、毎回約20組の親子が来ています。ここは新しいマンションが多く、転勤族も多い地域です。子どもたちの成長や、お母さんたちのつながりをつくる場所になっています。0、1、2才の子どもたちがほとんどですが、午後は幼稚園児も多く参加しています。

歌や踊り、手遊びなど季節のことを配慮したものや、NHKの子ども向け番組で流行っているものを取り入れながら、30分から1時間の内容を考えて構成しています。楽しい素敵な会話をはさみながらのイベントは、あっという間に終わってしまいます。わざわざ遠くから来る親子もいるようです。

■みやぎNPO情報ライブラリーとは

「NPO情報ライブラリー」は、NPO・市民活動団体の皆さんから活動に関する情報をお預かりして、地域の市民・企業など社会一般に広く公開・発信する情報発信支援事業です。



聞いたお母さんたちはいつも涙するという、オリジナルのCD「ありがとう」は全労済経済企画部地域貢献助成事業子ども分野の協力で作成しています。この中には、テーマ曲のピンポンパン☆の曲や踊りのレシピが入っており、家でもできるものです。『「ピンポンパン☆に行くよ」と私(お母さん)が言うと、グズグズしている我が子は、すぐ支度をしだすんです。』とあそびばを楽しみにしている様子が伺えるそういったお母さんの声、歌や踊りを楽しむ親子の様子、それがピンポンパン☆の活動の原動力になっています。

読者のみなさんへのメッセージ

子どもは自らまわりの環境に働きかけ、いろいろな能力を身に付けていきます。そして安心できる身近な人や自然の環境の中で、身体的、情緒的、知的発達や社会性が発達していきます。ぜひ、ワクワクドキドキする私たちのピンポンパン☆のイベントに参加してみてください。そして会えることを楽しみにしています。

お問い合わせは

SENDAI NPO

子育て応援隊ピンポンパン☆

電話:070-5621-0972

メール:

pinponpanhosi@willcom.com

次号の団体は

代表 菅野さんよりご紹介

「東北HIVコミュニケーションズ(THC)」

「HIV/AIDS によって自らの生命や生き方に影響を受けた人々が、共に生きる社会を作り出すこと」を目的に活動しているボランティア団体です。

(大町事務局 伊藤浩子)

サポートご協力 ありがとうございます

■平成25年度会員 (敬称略・順不同、2013年10月1日～11月30日)

(正会員)

(特)イコールネット仙台、(特)やまがた育児サークルランド、桃生和成、青木ユカリ、(公社)セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、小林正夫、(株)東日本放送、中津涼子

(準会員)

(特)ネットワークオレンジ、(特)茨城NPOセンター・コムズ、高齢者配食サービスぽけっとはうす、(特)広瀬川の清流を守る会、遊佐さゆり、食育NPO「おむすび」

■企業・団体協力(50音順、敬称略)

(株)オーカム(事務所スペースを社会貢献価格にて)、富士ゼロックス宮城(株)(カラーコピー機を社会貢献価格にて)

ご寄附ありがとうございます

■東日本大震災救済・復興支援活動のための寄付総額(2013年11月末)

プロペラ募金へのご寄付(当センターが行う復興支援活動を応援する寄付)……………238件 24,208,556円

せんだい・みやぎNPOセンター 新年会2014 ～感謝・つながり～

1年の始まりに、当センターが新年のご挨拶と感謝の気持ちをこめて開催する「つながり」の場です。

新年のご挨拶、参加頂きました皆様の自由な意見交換の時間のほか、当センターの事業を通じて「つながったストーリー」を聞いていただく時間もございます。

皆様のお越しをお待ちしております。

◆日 時:2014年1月10日(金) 13時～16時(開場12時45分)

◆会 場:仙台市市民活動サポートセンター6F セミナーホール

◆参加費:500円(当日会場にて申し受けます)

※ソフトドリンク、スナックを用意しております。

◆対 象:NPO、NGO、行政、企業、一般の方々、どなた様も大歓迎です。

◆お申込み

当センターHPから申し込み用紙をダウンロードまたは、

①ご所属②お名前③連絡先を添えてメールにてお申込み下さい。

E-mail:minmin@minmin.org

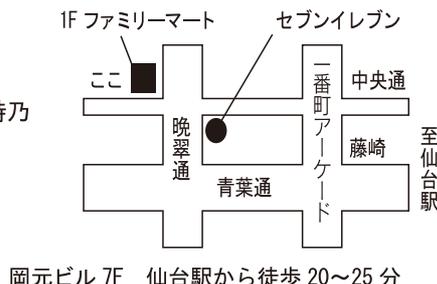
HP:http://www.minmin.org/?p=2350

連絡先

特定非営利活動法人 せんだい・みやぎNPOセンター
〒980-0804 仙台市青葉区大町2-6-27 岡元ビル7F
TEL:022-264-1281 FAX:022-264-1209
E-mail:minmin@minmin.org HP:http://www.minmin.org/

発行:(特活)せんだい・みやぎNPOセンター

代表理事 大滝精一
紅邑晶子
編集部:伊藤浩子 高尾詩乃
発行日:2014年1月1日
デザイン:氏家朗



編集後記

当センター本部事務局の移転、仙台サポセン・多賀城サポセンのセンター長が若い世代へと交代、組織体制の見直し、といった大きな変革に取り組んだ2013年。

2014年も引き続き、組織の方向性を定め直し「Reborn」をカタチにしていきたい。内外ともにチャレンジとイノベーションを起こせる組織を目指して。

(伊藤浩子)

2013年は大変お世話になりました。個人的なことを振り返れば、8月に長野県、12月に秋田県と、いままで行ったことのない土地に訪れた一年でした。それぞれの土地を体感することによって、より宮城がどのような場所なのか考えるようになりました。2014年も、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(高尾詩乃)